

時	論
新	論
理	想
論	

刺繍布に込められた思い

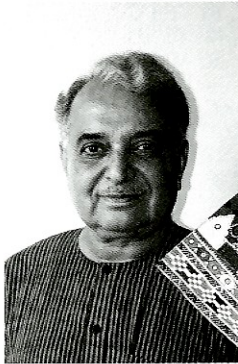
中谷 純江 (なかたに すみえ)

大阪大学非常勤講師 本館外来研究員

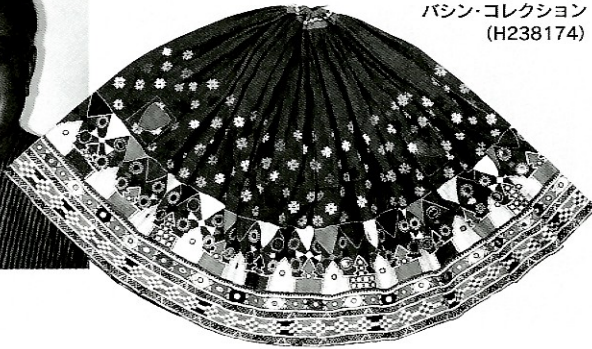
手工芸開発に貢献

今年一〇月九日から、民博で「インド刺繍布のきらめき」という企画展を開催することになった。展示されるのは、おもにインド西部グジャラート州のもので、B・B・バシンという人物から民博が入手したものである。バシン氏は、インドで三〇年以上も手工芸開発に携わってきた経歴をもつ。長年の仕事をとおして、たくさん

B.B.バシン氏 NGOパルサナ代表
(金谷美和撮影)



女性用スカート
バシン・コレクション
(H238174)



品と出会い、そこからコレクションが生まれた。

コレクションを始めた一九七〇年代、彼は警察官僚としてグジャラート州知事の補佐官を務めていた。早晩後のカツチ地方の困窮状態を視察する旅の途中で、女や子どもが身につけている刺繍のあまりの美しさとその多様性に驚いた。そして、彼女たちが貧しさをゆえに二重三文で刺繍を手放している現状に心を痛め、なんとかカツチの人びとが刺繍の技術によって生活する方法はないものかと、上司に直訴したそうだ。彼の情熱や能力を知る上司の尽力によって、行政官へと転身、手工芸開発に携わるポストをえた。その後、グジャラート州政府と中央政府の両方において、手工芸開発にかかわる重要なポストを歴任し、現在は自らNGOパルサナを組織している。

刺繍布の「声」を展示

初めて彼のコレクションを見たとき、ミラーワークの刺繍がきらめくたびに、ひとつひとつの布が生き生きとした表情で、何かを語りかけているような感じがした。バシン氏は箱のなかから刺繍布を次々に取りだしながら、「ほら、この鳥のかたち、様式化されたデザインを見てもらい」このピース、これまで見たものに、こんなに光るものは他になかったよ」「こ

のブラウスは、わたしの娘に職人さんがプレゼントしてくれたものだよ」などと話してくれた。最初は、ただ布がもつ魅力に圧倒されているだけのわたしだったが、彼がいつ、どのようにして、ひとつひとつの刺繍布を手に入れたのかを聞き、また、彼がこれまでに取り組んできた手工芸開発の仕事について深く知るようになるにつれて、このコレクションには刺繍布自体がもつ美や技のすばらしさ以外に、もうひとつ別の価値が隠されていることに、気がついた。

生活に困って生きてゆくために、大事な刺繍布を手はなした女たちの切ない思い、社会が近代化し、経済が市場化していくなかで、手仕事の技が忘れられ、生きる場を失った職人たちの失望、そうした現状に対して、伝統技術をもつ人たちが生活できる社会を作ろうとした人たちの熱意が、ひとつひとつの刺繍布に込められていたのである。

刺繍布が語るこれらの「声」を、かたちにして展示するという難題に、企画展実行委員のメンバーは挑戦した。バシン氏が愛した一枚一枚の刺繍布の魅力、その美しさや技術をきちんと伝えること、そして刺繍布が収集された社会背景や伝統技術を守ろうとする人びとの思いを知ってもらうこと、このふたつの願いを今度、はわたしたちが刺繍布に込めて、展示したいと思っている。